

実況中継「土曜講座」

第6号 2024年6月29日発行

市川学園 6月22日の土曜講座 於 北館1F多目的ホール

渡邊 英徳先生

「戦災・災害のデジタルアーカイブ」

東京大学情報学環教授



渡邊 英徳 先生のご紹介

- 1974年 大分県生まれ
- 1993年 大分県立佐伯鶴城高等学校 卒業
- 1997年 東京理科大学理工学部建築学科 卒業
- 1999年 東京理科大学大学院理工学研究科 修了
- 2013年 筑波大学大学院システム情報工学研究科 修了 工学博士
- 2018年 東京大学情報学環教授
- 2021年 東京大学広報戦略本部広報室 副室長を兼務

主な講義内容の紹介

今年度第3回となる土曜講座では、東京大学情報学環教授の渡邊 英徳先生より、「戦災・災害のデジタルアーカイブ」という題でお話を頂きました。

渡邊先生の講演は3Dマップを用いた広島市の紹介から始まりました。3Dマップには多数の人々の写真が映し出されていて、マップ上でそれらを選択すると詳細な資料が表示されるようになっていました。資料の内容は、原爆投下当時の記録であり、誰がどこでどのような状況だったのかをマップ上で確認することができます。これにより、渡邊先生が目指している「ストックされている情報をフローする」ということがどのようなことかを視覚的に理解することができました。その後は、沖縄戦における当時の人の動きや、東日本大震災で死亡してしまった人達の動きがデジタルマップ上で示されました。フローの仕方がマップ上に示すだけでなく、マップ上で人の動きを示すことによって様々な事柄が見えてくるのが分かりました。渡邊先生はこのようなプログラムをネット上で共有し、様々な人が使用できるようにしており、その有用性が現在起きているウクライナ戦争や能登半島地震で使用されたことも紹介されていました。デジタルマップ上で様々なストックされている情報をフロー化する取り組みの優れた汎用性をこの講座で知ることができました。

受講レポートから

戦争では、わかりやすい話が全体像のように語られるが、その場にいなくてもいなかったとしても、様々な戦争体験があるということを知り、私は今まで戦争などについて学んできたけれど、それは一部であることに気づかされました。また、AIなどの最先端の技術が未来のために使われていることに触れられ、技術の進歩に対して前向きな気持ちになれました。世界にはまだまだ途方もない数のストックや、フローしたはずなのに、受け流されてしまった情報がたくさんありますが、デジタルアーカイブと言う形で残して、未来へとつなぐことができると知り、この技術について学びたいと思いました。さらに、会話をすることがとても重要だと感じました。



(中学1年、女子)

まず、災害が発生した時は、目に見えないところでたくさんの人々が行動を起こしていることに注目した。能登半島地震が発生した時は、実家でテレビを見て過ごしながら、テレビで放送される被害状況を確認するだけであった。テレビを見ながら沿岸の被害状況は大丈夫なのか、夜になってからはどうなるのか、など疑問を感じたが、中学生の自分では



どうしようもない疑問だから「しょうがない」で片付けてしまっていた。しかし、渡邊先生のように災害が発生し、すぐにアーカイブを作るという行動を起こしている人がいることに気づくことができた。目に見えないところで、混乱の社会を支えている人もおり、さらにそのような人がとても大切な働きをしていると言うことを今日の講演で知ることができた。

(中学2年、男子)

広島においても、東日本大震災や、ウクライナ戦争においても、今自分達がいるところと、過去や遠い場所を地続きする力が、3Dマップやデジタルアーカイブにはあると感じた。また、それを未来のために継承していくことが私たちにもできることを知り、技術の「民主化」がとても素晴らしいことだと思った。あまり身近に感じることでできない過去や遠い地域の戦災や災害を身近に感じ、多角的視点や代表的なものにとらわれないことが大切だと感じた。



(中学3年、女子)

デジタルアーカイブは今と昔をつなげることができ、現代の私たちが過去の出来事とのつながりを感じられるものだった。今と昔の戦争や災害が起こった場所を比べると不思議な気持ちになった。一人一人の詳しい情報まであり、その人のことを深く考えることができた。震災や災害の記憶を残しておくためにも、デジタルアーカイブは人の心に残るコンテンツだと思った。過去の事を、現在の技術を使い伝わりやすくすることで、未来に受け継ぐということを繰り返しやっていくと、過去の人々の記憶を大切にできると思った。ストックされていた情報をフローにすることで、新たにストックが生まれたりフローにされたりしていく。それによって、過去の情報を現代とつなげることができるのが素晴らしいと思った。その過程において地元の人との交流など、その土地に根付いた関係が元となっているため、コミュニティの形成の重要さも感じた。また、この取り組みを維持していくためのやり方や、ソースコードを公開するなどといった取り組みが、とても素晴らしいと感じた。

(高校1年男子)

震災や災害について話を聞く機会は多くありましたが、このようにデジタルマップなど第三者目線で話を聞くのはほとんど初めてだったので、貴重な体験をすることができました。歴史の授業や現地でするには限界があるし、今後



自分たちが震災を体験することも絶対には言えないので、こういうマップなどを活用したいと思います。また、写真のカラー化やマップの作成にも興味があるので、機会があったらぜひ学んでみたいです。フローをストックに、ストックをフローに、を心に留めておきたいです。

(高校2年女子)

(文責：田島 明 先生)